

テレビニュース報道の分析

—ジェンダーの視点から

成城大学大学院文学研究科博士課程
コミュニケーション学専攻後期2年

石山 玲子

1. はじめに

私たちは多くの場合、メディアを通じて世界を見ている。例えば、実際に行ったことのない外国や直接には見たことのない国会での議論の様子なども簡単にイメージできる人が多いだろう。そのかなりの部分はテレビニュースなどが取り上げた映像が、自分の頭の中に「主観的現実」となって取りこまれたものである。Lippmann (1922) は、こうした出来事について媒介された知識を「頭の中の映像」(the pictures in our heads) と呼び、実際の世界で構成される「外界」つまり「現実」とははっきり区別している。さらに、私たちの現実認識や社会的現実の把握は、メディアが提示している現実が大きく依存している。そして、私たちは、真実であるものに基づくのではなく、真実であると知覚したものに基づいて考え行動している。このように考えると、ニュースには私たちの社会的現実を構成する機能があるといえる。

では、ニュースメディアは、一体どのような基準により現実世界から出来事を選択し報道しているのであろうか。Tuchman (1978) によれば、ニュース網は、視聴者の関心を引く適切なねたを探して中央に集めるような仕組みになっていて、視聴者の関心については、(1) 特定の場所で起きる出来事、(2) 特定の組織の活動、(3) 特定の話題、という3点を前提にし、ねたを収集しているという。また、Shoemaker & Reese (1996) は、ニュースバリューを次の6項目にまとめている—(1) 顕出性、重要性、(2) ヒューマンインタレスト、(3) 対立、論争、(4) 異常性、(5) タイムリー、(6) 近接性。すなわち、人々の生活に重要な影響を与える出来事、特定の人物に対する高い興味や関心、対立し論争が生

じているような問題、普段とは違う異常な出来事、現在生じている出来事、地理的に近接した場所で生じた出来事、などがニュースになりやすいという。

このようにニュースバリューにも様々なものがあるが、そこには、ジャーナリスト個人の差異だけでなく、ニュース制作過程におけるさまざまなレベルでの影響が及んでいる。たとえば、組織の上位にいるジャーナリストであるデスクらが、どれをどのような順位で取り上げてニュースとするか最終的な決断を下しているという。ところが、現在のジャーナリズムの雇用現状をみると、新聞業界も放送業界も極めて女性の数が少なく、とりわけ、役職が上になればなるほど、男性の占める割合が高くなる。結果的に、ニュース制作には、女性の視点が取り入れられにくくなるという（岩崎・小玉、1994）。そこで、本研究では、男女の性差に焦点を当てながらニュース報道のあり方を検討していくこととする。

これまで行われたニュース報道の分析に関する論文は多々あるが、男女の性別に焦点を当てた研究はそう多くはない。ここでは、まず、ニュースを伝える側であるキャスター、レポーターという送り手に着目しニュース制作過程を研究したものを見てみよう。これらの研究では、制度上の問題やニュース原稿を書くジャーナリスト自身のバイアスが問題として取り上げられている。Whitlow (1977) は、ゲートキーパー研究において、制度的ジェンダーバイアスの存在を明らかにし、このようなバイアスが、ニュース報道において伝統的な性別ステレオタイプの維持に影響を与えていると指摘している。また、Turk (1987) によれば、レポーターの性別による視点の違い、さらには取材対象となる人物の性別の相違によって、記事内容が異なるという。彼女は、実験的にジャーナリズム学科に在籍する大学生と大学院生にレポーターとしての役割を与え記事を書かせ、その結果を内容分析することにより、レポーターにおけるジェンダーバイアスの有無を探った。その結果、男女それぞれのレポーターは、取材対象が女性の場合には、男性の場合に比べ、より個人的な情報を多く取り入れた記事を書く傾向がみられた。また、女性レポーターは、取材対象となる人物の性別に関わらず、男性レポーターに比べ、より個人的な情報を多く取り入れた記事を書くという傾向がみられたという。この研究は、実際の記者を対象に行った実験ではないが、ニュースを伝える際に、ジェンダーバイアスが存在する可能性を示唆している。

次に、ニュース報道に現れる送り手に関する内容分析を見ていこう。これま

での研究において、男女の送り手は、報道量や分野において（性役割分担ともいべき）相違がみられることや、女性の送り手は男性の送り手に比べ年齢や容姿が重視されるのではないかと指摘がみられる。

Nelson (2003) は、1986 年と 2000 年のローカルニュースを取り上げ、画面に現れるレポーターの容姿に焦点をあて詳細な分析を行った。それによると女性の送り手は若さが重要視されていることが明らかになっている。

また、Rakow & Kranich (1991) によると、ニューストピックは男女別に担当が分かれていて、男性の送り手は、まじめで重要なニュース、そして、女性の送り手は、ヒューマンインタレスト、ライフスタイルのニュースを中心に伝えていたという。このような分野における男女の送り手に関する研究は日本でも見られていた。小玉 (1981) は、男女 2 人でならんで放送するコ・キャスター制¹が普及しはじめた 1981 年の NHK 夜 7 時のニュースを取り上げ、男女アナウンサーを比較し、原稿を読む量や分野について分析を行った。それによると、アナウンサーは男女 2 人並んでニュースを平等に伝えているように見えるが、実際には男女間には大きな差異が見られたという。つまり、男性アナウンサーは女性アナウンサーの 3 倍の量の原稿を読み、トップニュースは男性が担当していた。また、男性アナウンサーは女性アナウンサーに比べてハードニュースを多く読んでいた。分野をみると、政治・経済・防衛などのニュースは男性が多く読み、女性アナウンサーは主として社会・文化・季節の話題や天気予報を読むというように男女による役割分担が行われていたという。さらに、トップニュースは男性が担当していることについて、これまで女性がアナウンサーとして番組に登用されてこなかったという経験の不足という実態を挙げ、実力という面で捉えた場合の女性の力不足を認めながらも、「ニュースは男性」という伝統的考えが残っているのではないかと指摘している²。

続いて、小玉ら (1996) は、1994 年の「NHK ニュース 7」と「NHK ニュース 9」、米国「CBS イブニングニュース」と「CNN ワールドニュース」の 4 番組を取り上げ日米テレビニュースの比較研究を行い、さらに、1984 年に同様に行った研究との比較も試みている。まず、「NHK ニュース 7」における分析をみると、アナウンサーが原稿を読む項目数において男女の比較をしているが、1984 年にはベテラン女性アナウンサーの起用により男性よりわずかに多く 56.4% の項目を女性アナウンサーが読んでいたが、1994 年には女性アナウンサーが原稿を読む項目数は男性の 3 分の 1 に減少していたという。さらに、

1994 年のニュースに関し、レポーターの性別に関する分析を行っている。それによると、「NHK ニュース 7」の全ニュース項目のうち 13.7 % にレポーターが登場していて、そのうち、男女の割合を見ると 9 対 1 で、女性レポーターはわずか 1 割程度に過ぎなかった。しかも、女性レポーターの担当は、スポーツ大会の模様、宝くじなど街の話題、風物詩などのいわゆる「ひまネタ」を中心に伝えていたという。さらに、「NHK ニュース 9」についての分析も行っているが、レポーターの出現率は少なくわずか 5.3 % で、このうち女性レポーターはいなかった。

一方、米国「CBS イブニングニュース」と「CNN ワールドニュース」におけるレポーターの出現割合を見ると、およそ半数から 3 分の 1 を超え、その内女性レポーターは 24 % から 31 % を占めていた。女性レポーターの担当分野は多岐にわたっていて、「CNN ワールドニュース」に至っては、軍事においてボスニアやチェチェンなどの紛争地への派遣もあったという。これらから、アメリカでは 1984 年に比べ女性レポーターの量も増え分野的にもあらゆる範囲にわたっているが、日本では量も分野も限定されているとしていると結論づけている。

次に、ニュース報道の内容に描かれる女性に焦点を当てて見ていきたい。これまでの研究において、ニュース内容に女性があまり登場してこないこと、男性がニュースの主体として能動的にニュースに登場することが多いのに対し、女性は被害者など受動的に描かれることが多いこと、さらに、被害者として描かれる場合、女性の場合は特に人権を無視した犯罪報道となりがちであることなどが、問題として挙げられてきた（小玉、1991；井上、1992；Zoch & Turk, 1999）。

小玉（1991）は、1978 年 11 月に全国ネットで放送された NHK「7 時のニュース」と TBS「ニュースコープ」の 2 番組と、12 月に放送されたローカルニュースの NHK「ニュースセンター 6.40」と TBS「テレポート 6」の 2 番組を取り上げ、ニュース報道の内容に描かれる人物の男女差に焦点を当てた分析を行っている。

まず、NHK「7 時のニュース」と TBS「ニュースコープ」の分析を見ると、ニュース内容に描かれる男性と女性の出現割合は、NHK では 5.6 対 1、TBS では 9.4 対 1 で、圧倒的に男性が占める割合の方が多かった。さらに、男性はニュースの重要な核となる政治家、決断者、加害者などや、反対者、評論家などとして「能動的」にニュース内容に登場する一方、女性は、能動的に登場す

る人物から影響を直接受けた被害者、関連人物など、あるいは、偶然居合わせた人など「受動的」にニュースに登場していたという。能動的に登場する人物について男女の割合を見ると、NHK は 6:1、TBS は 21:1 の割合で、女性が能動的に出現する割合はきわめて低かった。

次に、NHK「ニュースセンター 6.40」とTBS「テレポート 6」というローカルニュースでの分析では、男女における比率は、NHK 3.1 対 1 で TBS 3.9 対 1 となり、先の全国ネットのニュースに比べ女性比率が高まるものの、依然男性の方がニュース内容に描かれる率は高かった。さらに、能動的にニュースに描かれる率は、全国ネットのニュースの場合と同様で男性の方が圧倒的に高く、男女の割合に大きな開きが見られたという。

さらに、小玉 (1991) は、1974 年と 1984 年の「NHK 夜 7 時のニュースと米国「CBS イブニング・ニュース」を取り上げて、ニュース内容に描かれる人物に関し男女の割合を比較している。その結果、全ニュース項目に女性が出現する項目数の割合は、「NHK 夜 7 時のニュース」では 1974 年 9.9 %、1984 年 12.3 %、「CBS イブニング・ニュース」では 1974 年 10.9 %、1984 年 21.7 % であった。これらの 10 年間の変遷をみると、「NHK 夜 7 時のニュース」はあまり大きな変化はないが、「CBS イブニング・ニュース」は倍増していた。全体的に見ると依然男性の方が多いが女性の出現率は増加傾向にあるという。

以上、ジェンダーの視点から行われた研究を見てきたが、本研究では、テレビのニュース報道を伝える送り手と、ニュース報道の内容の中に描かれる人物に焦点を当て、これまで指摘されてきた問題点に、その後に変化がみられるのかどうか、現状を探ることとする。

2. 研究方法

2-1. 概要

本研究では、2001 年 3 月 12 日 (月) から 16 日 (金) までの平日に、NHK、日本テレビ、テレビ朝日の 3 局で夕方と夜の時間帯に放送されたニュース番組計 6 番組を分析対象とし、コーディングシートにもとづく内容分析を行った。

取り上げた夕方のニュース番組は、NHK の「ニュース 7」(午後 7 時～午後 7 時 30 分)、日本テレビの「ニュースプラス 1」(午後 5 時～午後 7 時)、テレビ朝日の「スーパー J チャンネル」(午後 4 時 55 分～午後 7 時) の 3 番組で

ある。夜のニュース番組としては、NHKの「ニュース10」（午後10時～午後10時55分）、日本テレビの「今日の出来事」（午後10時54分～午後11時25分）、テレビ朝日の「ニュースステーション」（午後9時54分～午後11時10分）の3番組を取り上げた。これらの3局を対象とした理由は、この週の報道の視聴率をみると、これらの3局に視聴率の高いニュース番組が含まれていたためである。また、平日と週末では、放送されていたニュース番組の報道時間量が異なっていたり、番組によっては週末には放送されていない番組もあったため、今回の分析には平日のみを取り上げ、局ごとに夕方と夜のニュース番組を合わせて分析した結果を報告する。

2-2. 研究の視点

「ニュース番組」は、その内容の特徴により、いくつかの部分に分けられる。主流となる通常の「デイリーニュース」以外に、オープニング時などに短い時間で次々と出来事を伝える「ダイジェスト」と呼ばれる形式のもの、さらに、事前にテーマを絞って制作し番組表などにも紹介される「企画・特集」、その他には、専門のキャスターを置く「スポーツ」と「天気予報」といった具合である（萩原、2001）。

本研究では、ニュース番組の中でもメインとなる「デイリーニュース」と「ダイジェスト」に焦点を当て分析を行った。中でも、ニュースを伝える送り手とニュース内容に描かれる人物を取り上げ、その男性と女性の差異に注目していく。

2-3. コーディングとコーダー

作成したコーディングシートにしたがって、訓練を行ったコーダーが、ニュース項目と人物を対象にコーディングを行った。その際、客観性を付すため、ダブルコーディングを行った。ほとんどのケースは両者間においてコーディング結果の一致を見たが、結果が異なったケースに限っては、別のコーダーを立て3者で協議をして決定した。

2-4. 分析項目

まず、萩原（2001）を参考に、それぞれのニュース番組につき、番組全体の構成表を時間の流れに従い作成し、「デイリーニュース」、「ダイジェスト」、

「企画・特集」、「スポーツ」、「天気予報」、「その他」の6部分に分類した。

次に、作成した構成表の中から「デイリーニュース」と「ダイジェスト」を取り上げ、その中でニュース項目を分析単位とし、1) 項目の秒数、2) テーマ、3) 舞台となる場所、について分析を行った。さらに、それぞれのニュース項目に出てくる人物を対象に、ニュースを伝える送り手とニュース内容に描かれる人物（以下「登場人物」と記す）に区別し、以下の項目を分析した。4) 性別、5) 年齢、6) 国籍、7) 役割または職業。尚、対象とした人物は、ニュース項目の中で発言した人とした。送り手に関しては、ニュース項目ごとに登場すれば1回とカウントした。従って、同一人物でも項目ごとに繰り返しカウントされている。それに加え、登場人物の場合は、映像と共にテロップで名前が放映された場合やナレーターが名前を伝えている場合に限って、発言をしていなくとも対象とした。その後、ニュース内容の登場人物の中で、8) 街頭インタビューを受けた人、9) コメントをする識者、について詳細な分析を行った。本稿では紙面の制約上、人物を中心に、性別に焦点をあてた主要な分析結果について見ていくことにする。

3. 分析結果

(1) ニュースを伝える送り手

まず、ニュースを伝える送り手を中心に行った分析の結果について述べよう。

3-1. ニュースを伝える送り手の人数と性別

ニュース項目数を見るとNHKのニュースは183項目、日本テレビのニュースは145項目、テレビ朝日のニュースは232項目あった。

その中で、送り手の人数を見ると、NHKのニュースでは延べ242人、日本テレビのニュースでは延べ276人、テレビ朝日のニュースでは延べ331人であった。次に、男女における比率を見ると、表1に示すとおり、NHKでは2:1（男性163人、女性79人）の割合で男性の割合が高かった。NHKほどではないが、日本テレビでは、男性が53%（147人）で女性が47%（129人）、テレビ朝日では、男性が57%（187人）で女性が44%（144人）と男性の占める割合の方が若干高かった。ここでは、まず、これらの送り手を対象に分析を行った。

3-2. 送り手の役割と性別

送り手を、主にニュース番組の顔となりニュースを伝える「メイン・キャスター」、お天気キャスターやスポーツキャスターなどの「その他のキャスター」、報道現場へ出かけて行きレポートをしたり、スタジオで解説を行う「記者、レポーター」、画面に顔は見せずにニュースを読む「ナレーター」の4種類に分類した。

その結果、3局ともメイン・キャスターとナレーターの占める割合が高く、メイン・キャスターが5割から6割、ナレーターが2割から3割を占めていた。記者、レポーターは7%から15%、その他のキャスターは1%から8%と少なかった。

次に、送り手の役割と性別をクロス集計し χ^2 検定を行った。その結果、3局ともに有意差が見られた(表1参照)。ここでは、役割ごとに男女の割合を見ていこう。

表1 局別にみた送り手の役割による性別の割合

| | NHK | | 日本テレビ | | テレビ朝日 | |
|-----------|-------|------|-------|-------|-------|-------|
| | 男性 % | 女性 % | 男性 % | 女性 % | 男性 % | 女性 % |
| メイン・キャスター | 70.3 | 29.7 | 43.6 | 56.4 | 49.0 | 51.0 |
| ナレーター | 57.6 | 42.2 | 66.0 | 34.0 | 56.3 | 43.7 |
| 記者、レポーター | 100 | 0 | 75.0 | 25.0 | 86.3 | 13.7 |
| その他のキャスター | 28.6 | 71.4 | 40.9 | 59.1 | 100 | 0 |
| 全体 | 67.4 | 32.6 | 53.3 | 46.7 | 56.5 | 43.5 |
| (n) | (163) | (79) | (147) | (129) | (187) | (144) |

NHK : $\chi^2 = 19.60$, $df = 3$, $p < .001$; 日本テレビ : $\chi^2 = 16.51$, $df = 3$, $p < .005$;

テレビ朝日 : $\chi^2 = 23.88$, $df = 3$, $p < .001$

まず、メイン・キャスターだが、NHKでは、7:3で男性が占める割合の方が高かった。それに対し、民放をみると、日本テレビでは、男性が44%で女性が56%、テレビ朝日では男性が49%で女性が51%と若干女性の割合の方が高いという傾向がみられた。次に、ナレーターだが、3局ともに男性がおよそ6割前後を占め、男性が占める割合の方が高いという傾向がみられた。さらに、記者、レポーターにおいては、いずれも男性の占める割合の方が圧倒的に高いという結果であった。とりわけ、NHKでは、レポーターは男性のみに限られ、民放2局においても、男性が7~8割を超える高率であった。その他の

キャスターにおいては、3局にばらつきがみられ、NHKでは3:7、日本テレビでは2:3で、女性の占める割合が高く、テレビ朝日では男性のみという結果であった。

3-3. 送り手のテーマと性別

まず、分析対象となったニュース項目のそれぞれにつき、主たるテーマが何かによって、「政治」、「経済」、「国際」、「軍事・防衛」、「犯罪・事件」、「風物」、「気象・天気」、「スポーツ」、「文化・教育」、「芸能」、「科学・技術」、「生活」、「話題」、「その他」の14項目に分類した。その後、「その他」を除き、「政治」、「経済」と「国際」をハードニュース、「軍事」と「犯罪・事件」をバイオレントニュース、「風物」、「天気」、「スポーツ」、「文化・教育」、「芸能」、「科学」、「生活」と「話題」をソフトニュースとし3種類に再分類した。

次に、送り手がどのような分野に登場するのかを局ごとに見ると、表2に示すとおり、NHKで最も割合が高かったのは、犯罪・事件が34%で、次いで、政治23%、経済が17%であった。日本テレビにおいても犯罪・事件が最も割合が高く54%あり半数を超え、政治が14%であった。テレビ朝日も同様で、犯罪・事件が44%、と最も高い割合を占め、政治が23%、経済が15%と続いていた。3局ともに犯罪・事件のニュースは最も割合が高く、この傾向は民放2局において顕著で、全体の3分の1から半数を超える多さであった。次に政治ニュースが多く、経済ニュースが続き、これら3分野のニュースが占める割合は、全体の4分の3から8割を超える多さだった。それ以外の分野のニュースはどれも少なく、残りの11分野すべてを合計しても2割から4分の1程度であった。

表2 局別にみた送り手のテーマにおける割合

| | 犯罪・事件 % | 政治 % | 経済 % | その他の テーマ*% | 全体% (n) |
|-------|------------|---------|---------|---------------|-----------|
| NHK | 34.3 | 23.1 | 17.4 | 25.2 | 100 (242) |
| 日本テレビ | 54.0 | 14.1 | 5.4 | 26.5 | 100 (276) |
| テレビ朝日 | 43.5 | 23.0 | 14.5 | 19.0 | 100 (331) |

* 「その他のテーマ」とは、分析した全14項目中「犯罪・事件」「政治」「経済」以外のテーマ11項目の合計%を指す。

次に、ハードニュース、バイオレントニュース、ソフトニュースと再分類した後の3つの分野と送り手の性別をクロス集計し χ^2 検定を行った。その結果、3局ともに有意差は見られなかった。

さらに、送り手の中から性差が見られた記者・レポーターのみを取り上げ、テーマと性別をクロス集計し χ^2 検定を行ったが、有意差は見られなかった。

3-4. 送り手の年齢と性別

送り手の中で、声だけでは年齢がわからないナレーターを除き、それ以外の送り手であるメイン・キャスター、その他のキャスター、記者、レポーターの年齢を「20才未満」、「20代」、「30代」、「40代」、「50代」、「60代」、「70才以上」、「不明者」の8項目に分類した。その結果、表3に示すとおり、20代は3局ともに割合は少なく1桁で、30代から50代が中心的な役割を占めていた。60才以上の送り手も見られなかった。

表3 送り手の性別による年代の割合

| | | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 不明 | 全体 %(n) |
|-------|------|------|------|------|------|-----|------------|
| NHK | 男性 % | 0 | 15.8 | 83.3 | 0 | 0.9 | 100 (114) |
| | 女性 % | 11.6 | 88.4 | 0 | 0 | 0 | 100 (44) |
| | 全体 % | 3.2 | 35.7 | 60.5 | 0 | 0.6 | 100 (157) |
| 日本テレビ | 男性 % | 4.7 | 17.6 | 1.2 | 71.8 | 4.7 | 100 (85) |
| | 女性 % | 13.4 | 64.9 | 20.6 | 0 | 0 | 100 (97) |
| | 全体 % | 9.3 | 42.9 | 11.5 | 33.5 | 2.7 | 100 (182) |
| テレビ朝日 | 男性 % | 3.4 | 54.8 | 7.5 | 32.9 | 1.4 | 100 (146) |
| | 女性 % | 16.8 | 34.5 | 47.8 | 0 | 0.9 | 100 (113) |
| | 全体 % | 9.3 | 45.9 | 25.1 | 18.5 | 1.2 | 100 (259) |

NHK : $\chi^2 = 95.58$, $df = 3$, $p < .001$; 日本テレビ : $\chi^2 = 114.00$, $df = 4$, $p < .005$;

テレビ朝日 : $\chi^2 = 96.43$, $df = 4$, $p < .001$

* 「送り手」のうちナレーターは除く

次に、送り手の年齢と性別をクロス集計し χ^2 検定を行った。その結果、3局ともに有意差が見られた。そこで、各局の男女における比率を見ると、NHKでは、男性は40代が中心で8割を超え30代が15%程度だったのに対し、女性は30代を中心に9割近くを占め20代が1割程度であった。20代と50代の

男性、40代と50代の女性は見られなかった。次に民放を見ると、日本テレビでは、男性は50代が多く7割を超え、30代が2割近かった。20代と40代の送り手も見られるが若干であった。一方、女性は30代を中心におよそ3分の2を占め、20代と40代がそれぞれ1割から2割であった。50代の女性は見られなかった。テレビ朝日では、男性は30代と50代に多く見られ、30代が半数を超え多かったものの、50代の送り手も3分の1程度見られた。20代と40代の送り手も見られるが少なかった。それに対し、女性は20代と40代が多く、それぞれ3分の1から半数近くを占めていた。20代も15%を超えていたが、50代の女性は見られなかった。NHKと民放2局を比べると、民放2局の方がさまざまな年代の送り手が見られ、送り手における年代層が厚いという傾向が見られた。しかし、NHKの男性は40代以下、民放2局の男性は50代以下であったのに対し、NHKの女性は30代以下、民放2局の女性は40代以下に限られていた。3局を通じて、男性と比較すると女性に関しては若年傾向が見られ、民放2局と比較するとNHKにおいてその傾向は顕著だったといえよう。

(2) ニュースの内容の中に描かれる人物—登場人物

ここまでは、ニュースを伝える送り手の分析結果を中心に見てきたが、ここからは、ニュースの内容の中に描かれる人物である登場人物を取り上げ同様の分析を行った結果について見ていく。

3-5. 登場人物の人数と性別

図1に示すとおり、登場人物の人数を見ると、NHKでは延べ220人、日本テレビでは延べ269人、テレビ朝日では延べ381人であった。送り手の人数と登場人物の人数を比較すると、テレビ朝日は、登場人物の方が多いという傾向が見られるものの、他の2局は、ほぼ同数であったといえよう。

次に、登場人物の男女における比率を順に見ていこう。NHKは、男性が占める割合が圧倒的に高く、男性が86% (189人) で女性が14% (31人) という結果であった。民放でも同様の傾向がみられ、日本テレビでは、男性が81% (217人) で女性が19% (52人)、テレビ朝日では、男性が84% (321人) で女性が16% (60人) という割合だった。3局ともに、男性の比率が高く8割を超え、女性は2割に満たず少数という結果であった。

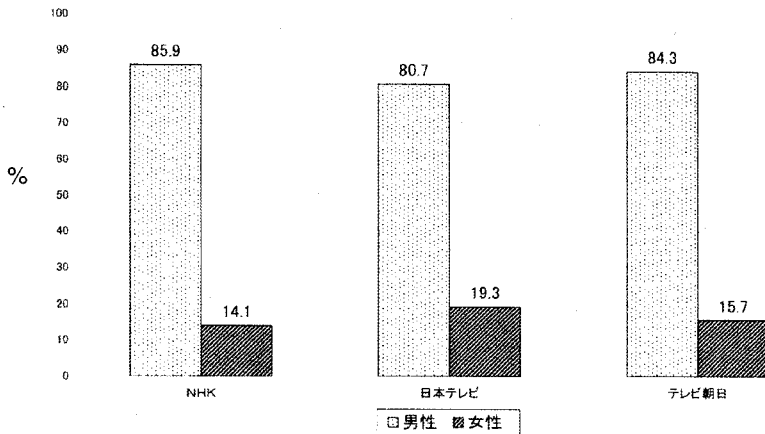


図1 局別に見た登場人物の男女比率

送り手の場合は女性が3割～4割を超えていたことを考えると、登場人物の場合は、特に、男女差が著しいことがわかる。

3-6. 登場人物の職業と性別

次に、登場人物の職業を、「政治家・役人」、「警察官・軍人」、「宗教関係者」、「教育関係者」、「健康・医療関係者」、「財界人・法律関係者」、「専門・技術職」、「芸能・芸術家」、「スポーツ関係者」、「評論家」、「皇族・王室」、「労務職」、「農林水産業従事者」、「会社員・店員」、「主婦・主夫」、「学生」、「年金受給者」、「失業者」、「不明」の19項目に分類した。その後、登場人物の職業と性別をクロス集計し χ^2 検定を行った。その結果、3局ともに有意差が見られた(NHK: $\chi^2 = 64.31$, $df = 12$, $p < .001$; 日本テレビ: $\chi^2 = 79.00$, $df = 15$, $p < .001$; テレビ朝日: $\chi^2 = 89.70$, $df = 13$, $p < .001$)。

まず、登場人物の職種の数を経性別に見ると、NHKは、男性13職種、女性8職種に分類された。男性の場合はさまざまな職種をもつ人々が登場していたのに対し、女性の場合は職種が限られる傾向があり、男性のおよそ3分の2以下であった。民放2局でも同様に、日本テレビでは、男性14職種に対し、女性8職種、テレビ朝日は、男性14職種に対し、女性7職種であった。このうち、3局ともに男性だけが登場する職種は、「財界人・法律関係者」、「専門・技術職」、「芸能・芸術家」の3種であった。一方、3局ともに女性だけが登場する

職種はなかった。「年金受給者」と「失業者」に分類された人は男女ともにいなかった。

次に、女性がどのような職業に就いているかを見ると、NHK で最も多かったのは職業がわからなかった不明者でおよそ 3 分の 1 を占めていた。次いで、「学生」、「政治家・役人」がそれぞれ 2 割前後で順に続いた。それ以外の職種は一桁と少なかった（図 2）。民放 2 局においても同様に不明者は最も多く、およそ半数近くを占めていた。不明者の次に割合が高いのは「政治家・役人」で 2～3 割あった。その他、テレビ朝日においては、「主婦」、「会社員・店員」が 1 割程度の割合で見られたが、2 局ともに、それ以外の職種は一桁とわずかであった（図 3、図 4 参照）。

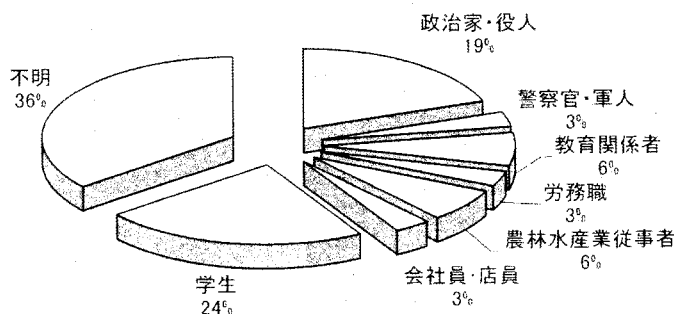


図 2 NHK における女性登場者の職業

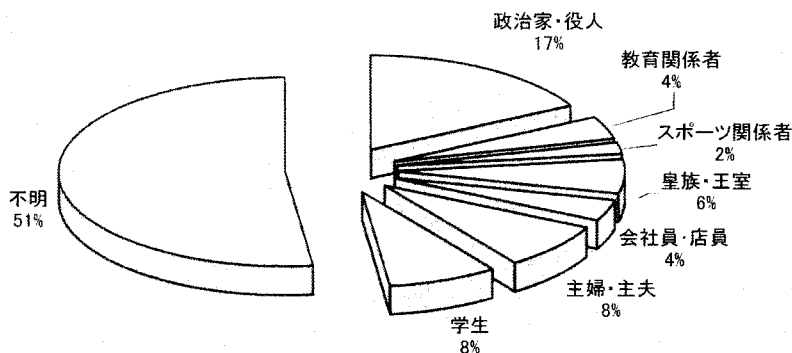


図 3 日本テレビにおける女性登場者の職業

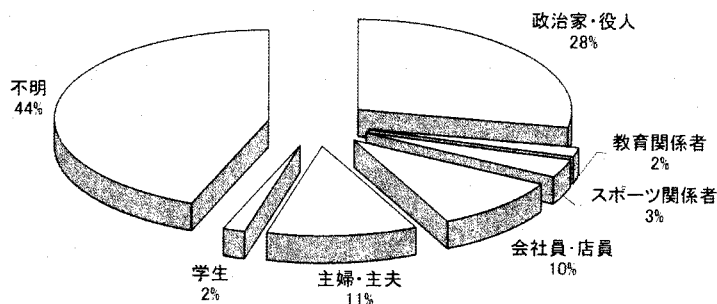


図4 テレビ朝日における女性登場者の職業

同様に、男性がどのような職業に就いているかを見ると、女性で最も多かった不明者は男性では比較的少なく女性の5分の1から3分の1に過ぎず、1割から2割程度だった(図5、図6、図7参照)。その代わり最も多かったのは、3局ともに「政治家・役人」で、NHKにおいては「政治家・役人」が半数を超え、「財界人・法律関係者」が約2割と続いた。民放でも同様な傾向が見られ、日本テレビでは、「政治家・役人」がおおよそ3分の1を超え、テレビ朝日では、「政治家・役人」が半数を超えていた。民放2局における「会社員・店員」の割合は、1割を超え、同様に、日本テレビでは、「財界人・法律関係者」も1割を超えた。民放2局において、それ以外の職種は一桁であった。

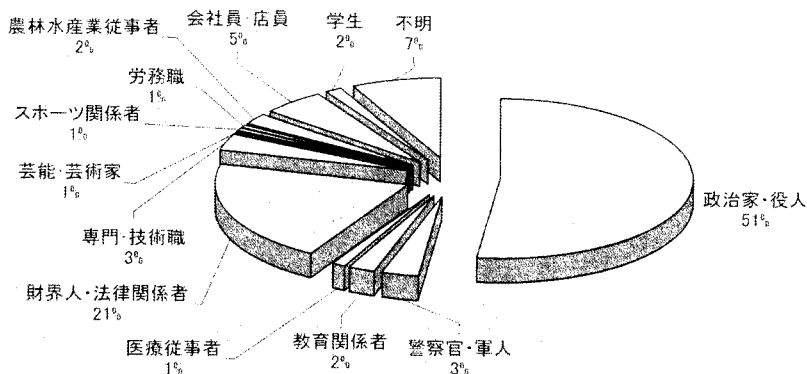


図5 NHKにおける男性登場者の職業

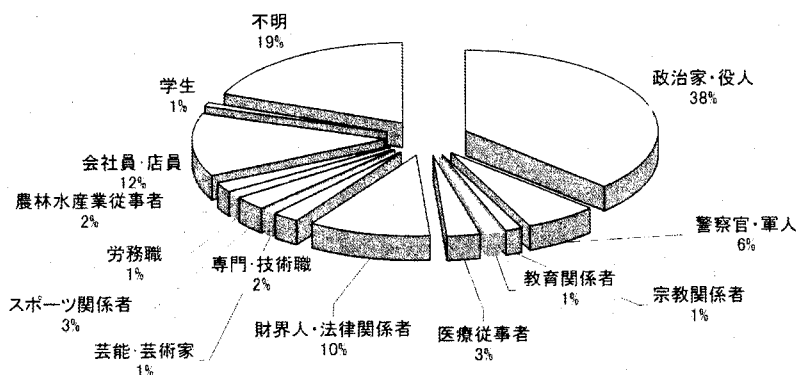


図6 日本テレビにおける男性登場者の職業

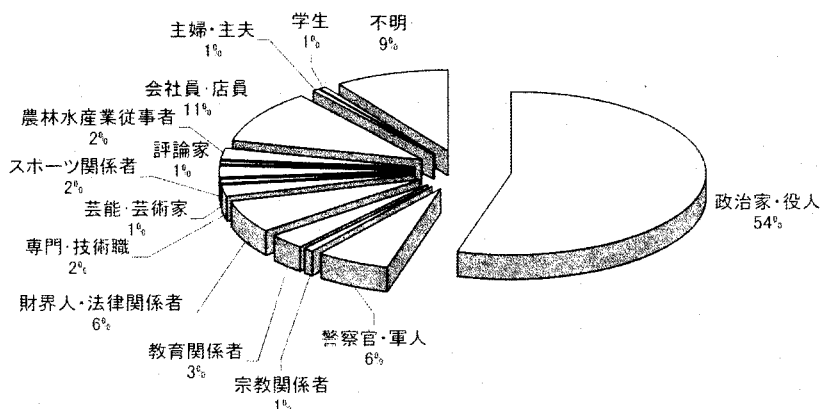


図7 テレビ朝日における男性登場者の職業

さらに、職種ごとの男女における比率をみてみると、3局ともに、女性の政治家・役人は1割以下と少なかった。「会社員・店員」も同様な傾向で、いずれも女性は1割前後であった。つまり、「政治家・役人」も「会社員・店員」も女性の中に占める職業の割合としては2桁で比較的割合が高い職種ではあるが、男性と比べると、女性の割合はどちらも高くないことがわかった。

3-7. 登場人物のテーマと性別

登場人物が、どのようなテーマのニュースに登場するかによって、送り手の

場合と同様に 14 項目に分類し、その後、さらに、ハードニュース、バイオレントニュースとソフトニュースの 3 項目に再分類した。

まず、最初に分類したテーマ分野に従って結果を見ると、表 4 に示すとおり、NHK で最も割合が高かったのは、政治で 4 割、次いで経済、犯罪・事件が続く 2 割であった。日本テレビでは、犯罪・事件が最も割合が高く約 4 割あり、次いで、政治が 3 割、経済が 1 割を超えた。テレビ朝日で最も高かったのは、政治で約 4 割、次いで、犯罪・事件が 3 分の 1 を占め、経済が 1 割を超えた。つまり 3 局ともに政治ニュースは多く 3、4 割を占めたが、それに加え、民放においては犯罪・事件のニュースが占める割合が高いという傾向が見られた。いずれにしても、政治、犯罪・事件、経済の 3 テーマに登場する人物がニュース報道全体の 8 割に達していた。その他のテーマは、すべて合わせても 1 割から 2 割程度に過ぎなかった。

表 4 局別にみた登場人物のテーマにおける割合

| | 犯罪・事件 % | 政治 % | 経済 % | その他の テーマ* % | 全体 % (n) |
|-------|------------|---------|---------|----------------|-----------|
| NHK | 19.5 | 39.5 | 20.5 | 20.5 | 100 (220) |
| 日本テレビ | 40.5 | 30.9 | 13.4 | 15.2 | 100 (269) |
| テレビ朝日 | 34.4 | 40.9 | 12.9 | 11.8 | 100 (381) |

* 「その他のテーマ」とは、分析した全 14 項目中「犯罪・事件」「政治」「経済」以外のテーマ 11 項目の合計 % を指す。

次に、登場人物の再分類後のテーマ分野と性別をクロス集計し χ^2 検定を行った。その結果、3 局ともに有意差が見られた (NHK : $\chi^2 = 35.47$, $df = 2$, $p < .001$; 日本テレビ : $\chi^2 = 19.52$, $df = 2$, $p < .005$; テレビ朝日 : $\chi^2 = 4.90$, $df = 2$, $p < .1$)。図 8 に示すとおり、NHK の男性で最も割合が高かったのは、ハードニュースで 6 割を超え、次いでバイオレントニュースが 4 分の 1、ソフトニュースが 1 割であった。これに対し女性では、ソフトニュースの割合が最も高く 5 割を超え、ハードニュースが 45 %、次いでバイオレントニュースはわずかであった。男性における傾向は民放 2 局においても似ており、最も高かったのはハードニュースで、NHK 同様 6 割を超え、次いで、バイオレントニュースが 3 分の 1、ソフトニュースがわずかであった。

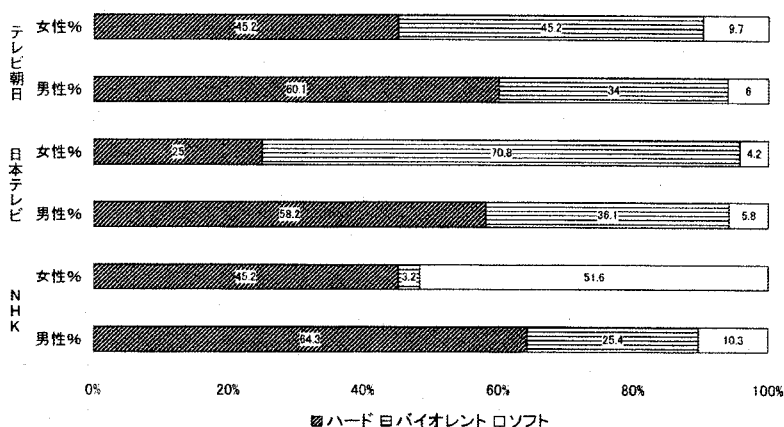


図8 登場人物の性別によるテーマの割合

一方、民放の女性における傾向は NHK と異なり、割合が高かったのはバイオレントニュースで、日本テレビでは、7 割を超え、次いで、ハードニュースが 4 分の 1、ソフトニュースがわずかであった。テレビ朝日では、バイオレントニュースとハードニュースが 45 %、ソフトニュースが 1 割という割合であった。

つまり、男性は 3 局ともにハードニュースが 6 割を占め最も多かったが、女性は NHK と民放 2 局において違いが見られた。女性の場合、NHK はソフトニュースが 5 割と最も高い割合を占めていたが、民放ではバイオレントニュースが 5～7 割を占めていた。それに比べ、NHK におけるバイオレントニュースと民放のソフトニュースの割合は低く、ともに 1 割以下という少なさであった。

3-8. 登場人物の年齢と性別

登場人物の年齢を「20 才未満」、「20 代」、「30 代」、「40 代」、「50 代」、「60 代」、「70 才以上」、「不明」の 8 項目に分類した (表 5 参照)。その結果、3 局とも 40 代、50 代、60 代の割合が高かった。局ごとに順に見ていくと、NHK では、60 代が最も多くおよそ 3 分の 1 を占め、次いで 50 代が約 3 割近く、40 代が 2 割であった。日本テレビでは 50 代が最も多くおよそ 3 分の 1 を占め、

次いで 40 代、60 代が 2 割前後で続いた。テレビ朝日では 60 代が最も多く 4 割近くを占め、次いで 50 代が 4 分の 1 を占め、40 代が 2 割近かった。いずれにしても、40 代から 60 代までの占める割合は高く、この 3 世代が占める割合は、民放でも 7 割を超え、NHK では 8 割を超えた。

表 5 登場人物における局別にみた性別の年齢の割合

| | | 20 才 未満 | 20 代 | 30 代 | 40 代 | 50 代 | 60 代 | 70 代 | 不明 | 全体 % (n) |
|-----------|-----|------------|------|------|------|------|------|------|-----|-------------|
| NHK | 男性% | 1.0 | 2.1 | 2.1 | 18.0 | 32.3 | 36.0 | 8.5 | 0 | 100 (189) |
| | 女性% | 3.2 | 25.8 | 6.4 | 29.0 | 0 | 32.3 | 3.3 | 0 | 100 (31) |
| | 全体% | 1.4 | 5.5 | 2.7 | 19.5 | 27.7 | 35.5 | 7.7 | 0 | 100 (220) |
| 日本 テレビ | 男性% | 1.4 | 5.5 | 6.0 | 20.7 | 39.6 | 20.7 | 4.1 | 1.8 | 100 (217) |
| | 女性% | 11.5 | 17.3 | 25.0 | 23.1 | 7.7 | 9.6 | 0 | 5.8 | 100 (52) |
| | 全体% | 3.3 | 7.8 | 9.7 | 21.2 | 33.5 | 18.6 | 3.3 | 2.6 | 100 (269) |
| テレビ 朝日 | 男性% | 0.9 | 3.1 | 5.6 | 16.5 | 26.5 | 40.5 | 6.5 | 0.3 | 100 (321) |
| | 女性% | 6.7 | 13.3 | 21.7 | 16.7 | 15.0 | 23.3 | 1.7 | 1.7 | 100 (60) |
| | 全体% | 1.8 | 4.7 | 8.1 | 16.5 | 24.7 | 37.8 | 5.8 | 0.5 | 100 (381) |

NHK : $\chi^2 = 42.87$, $df = 6$, $p < .001$; 日本テレビ : $\chi^2 = 56.40$, $df = 7$, $p < .005$;

テレビ朝日 : $\chi^2 = 46.73$, $df = 7$, $p < .001$

その後、登場人物の年齢と性別をクロス集計し χ^2 検定を行った。その結果、3 局ともに有意差が見られた。

各局別に男女における比率を見ると、NHK では、男性は 50 代と 60 代にそれぞれ 3 分の 1 ずつで、40 代が 2 割近かった。つまり、40 代から 60 代を合わせると 85 % という高率であった。一方、女性では、20 代、40 代、60 代に 25 % から 30 % 程度見られた。ともに 60 代の割合は高いものの、女性は男性と比べ 20 代の割合も比較的高かった。

民放でも、女性は低年齢における割合が高く、男性は高年齢の割合が高かった。日本テレビでは、男性は 50 代が 4 割を占め 40 代と 60 代が 2 割ずつであったのに対し、女性は、20 代、30 代、40 代の割合が高くそれぞれ 2 割前後であった。テレビ朝日では、男性は 60 代が 4 割と高い割合を占め、50 代が 4 分の 1 を超えていた。一方女性は、30 代と 60 代が 2 割を超えていた。

3 局を通じて、男性に比べ女性は 20 代以下の割合が高く、男性がわずか数 % であったのに対し、女性は 2 割から 3 割という結果であった。

4. 考察

ニュースを伝える送り手の男女における割合をみると、NHK では 2:1 で男性の割合が高く、日本テレビとテレビ朝日では男性の占める割合の方が若干高いという結果だった。テレビドラマなどの場合と同様、ニュースを伝える送り手にも、男性優位の傾向が若干みられたといえる³。しかし、送り手を役割ごとに見ると、送り手全体の半数以上を占め、しかも重要な役割を果たすと考えられるメイン・キャスターにおいては、NHK では、7:3 で男性が占める割合の方が高かったが、それに対し、民放 2 局では、若干女性の割合の方が高いという結果であった。これらを合わせて考えるならば、概して、民放 2 局においては、男女における明らかな差はみられないといっていよう。しかし、記者、レポーターにおいては、いずれも男性の占める割合の方が圧倒的に高く、民放 2 局においても、男性が 7~8 割を超える高率で、とりわけ、NHK では、レポーターは男性のみに限られていた。

さらに、何をニュースとして伝えるかという視点の相違により、取り上げられる出来事も異なってくる(小玉、1996)。このような記者、レポーターに男女における量的な偏りが見られることは、重要なことであろう。両性の視点を取り入れるという点においても、今後、さらなる改善へ向け、ニュースにおける女性の記者、レポーターの増員が望まれよう。

次に、テーマと送り手の性別の関係を分析したところ、これまで指摘されてきたようなテーマによる男女の偏りはみられず、男女における差がないよう考慮された結果となっていた。2003 年のイラク戦争で、日本の民放において女性の従軍レポーターが存在した例に見るように、今後、一層、テーマによる男女差はみられなくなるものと思われる。

しかし、送り手の年齢をみると、3 局ともに、性別による偏りがみられた。3 局を通じて、女性に関しては若年者が多いという傾向が見られ、女性は 20 代以下においては 3 局とも男性より出現率が高かった。一方、男性は年齢が高いほど割合が高まる傾向が見られた。これらの結果は、依然、女性の送り手は若さが重要視されていたことを示している。Engstrom & Ferri (2000) によるローカルテレビニュースのアンカーを対象に実施した郵送法調査 246 局の結果を見ると、女性アンカーは年齢や容姿における過度の強調を 1 番の職業上の障害と考えていたという⁴。このように、女性にみられる若さの重要視は、送り手

の女性に対して無用なプレッシャーを感じさせることとなり、優れた人材育成の阻害要因ともなり兼ねない。さらに、女性は若さが重要といった無用な価値観を視聴者に与えてしまう可能性もあると思われる。

次に、ニュースの内容の中に描かれる登場人物の男女における比率を見ると、3局ともに、男性の比率が高く8割を超え、女性は2割に満たず少数という結果であった。NHKは、最も男性の比率が高く、男性は女性の約6倍という多さであった。民放2局でも同様の傾向がみられ、日本テレビとテレビ朝日では、それぞれ男性が女性の4倍から5倍を占めていた。これは、ニュースの送り手の男女における比率とは比較にならないほどの高率であった。とりわけNHKに関していえば、一概に比較はできないが、1978年の7時のニュースを分析し男性は女性の5.6倍と指摘した研究(児玉、1991)当時と比べ、現在においてもさほどの進展はみられてはいないといつてよいであろう。このことは、送り手に関しては、これまでの研究において比較的指摘されてきたので性別に対する視点が取り入れられ配慮がなされてきたのに対し、登場人物に関しては、あまり注視されてこなかったことが結果としてあらわれていたといえよう。つまり、制作者は意識しているわけではないだろうが、結果としてこの差が示されていたと推測される。今後、登場人物に対する配慮が求められる。

さらに、登場人物について詳しく見ていくと、職種に関しても男女における多くの差異が明らかになった。例えば、職種の数を性別に見ると、男性の場合はさまざまな職種をもつ人々が登場していたのに対し、女性の場合は職種が限られる傾向が見られた。このうち、男性のみにみられる職種には「財界人・法律関係者」、「専門・技術職」など、社会における地位が高く、高給職といわれている職種が挙げられた。現実社会において、これらの職種に就いている男女における比率は男性の方が高いものの、女性も少なからずや存在はしているはずである。それが、女性の場合は画面には見えてこない。このことは、熟考に値する問題であろう。Gerbnerら(1980)の言葉を借りるならば、「テレビにおける不在は、社会においてあまり力をもたないこと」であるから。

さらに、この問題は、職業不明者の男女差にも現れていた。女性がどのような職業に就いていたかを見たとき、不明者が最も多く3分の1から半数を占めていたという分析結果は、当然のことながら、女性が映像の中で重要な役割を果たしているとは言い難い。つまり、不明者として描かれていたということは、人物としての顔がないということだからだ。男性における不明者の割合は比較

的少なく、女性の 5 分の 1 から 3 分の 1 に過ぎなかったことを考え合わせると、男女における重要度の差は歴然である。加えて、男性の場合、最も多かったのは、「政治家・役人」で、その他には、「財界人・法律関係者」、「会社員・店員」が多かった。一方、女性の場合も、不明者を除けば「政治家・役人」が多く、「学生」、「主婦」、「会社員・店員」が続いていた。しかし、男女ともに見られた「政治家・役人」と「会社員・店員」について職種ごとの男女における比率をみると、相対的に見てこれら 2 職種に女性のごく少ないことが明らかだった。さらに、男性と比べ女性の場合、「学生」、「主婦」が占める割合が高いという結果は、社会的に重要度が低い人物が取り上げられる傾向が見られたともいえるだろう。

登場人物が、どのようなテーマのニュースに登場するかを、ハードニュース、バイオレントニュースとソフトニュースに分類した結果、男女における差が見られた、と同時に、女性については NHK と民放 2 局間においても違いが見られた。つまり、男性は 3 局ともにハードニュースに登場する割合が最も高かったが、女性の場合、NHK はソフトニュースが最も高い割合を占め、民放ではバイオレントニュースが高い割合を占めた。送り手に関する分析では、少なくとも民放 2 局における男女差は認められなかったことを考えると、登場人物にはテーマによる偏りが明らかであった。例えば、経済に関するニュースの街頭インタビューなどにも男性だけを対象にしているなど、ニュース制作者の「ハードニュースは男性」という概念が無意識に反映されたものといえるだろう。現実社会において政治や経済という分野で活躍している人は男性が多いというものの、視点を変え違った切り口でニュースを伝えることも出来るのではないだろうか。

さらに、民放 2 局において登場人物の女性にバイオレントニュースが多いという結果が明らかになった。女性は受動的に被害者などとして描かれる場合が多いという傾向は 1978 年における研究（小玉、1981）においてみられていたが、本研究においてもいまだ同様な傾向が見られることが示唆されたといえよう。加えて、その結果は、ニュース番組の形態にも関連があると思われる。つまり、民放 2 局の夕方時間帯に放送されるニュース番組などにおいては、「デイリーニュース」以外にいわゆる女性を対象とした「企画」などのソフトニュース系のコーナーが独立し放送されていた。このことにより、番組としての全体的なバランスを考え、いわゆる「デイリーニュース」の中にソフトニュ

ースを取り込む傾向が見られなくなったのではないかと考えられる。これについては、今後、分析余地が残されている。

次に、登場人物の年齢と性別の関係を見ると、20代以下の女性の割合は男性より高く、一方、40代以上は男性の割合が極めて高かった。この女性の若年傾向は、送り手の場合以上に顕著で、女性は若さが強調されている結果となっていた。その理由を考えると、テーマとの関連が深いことが考えられる。つまり、男性の40代以上の割合が極めて高かったという点は、政治、経済などのハードニュースに男性が多く登場し、政治家や会社員における男性の比率が高かったことにつながっていると推測される。それとともに、いずれにしても、政治、犯罪・事件の3テーマに登場する人物がニュース全体の8割を超えていたという結果が示されていたが、この点において、ニュースバリューを再考する必要があるのではないだろうか。

5. おわりに

以上、ニュースの送り手とニュース内容に描かれる登場人物に関して男女の差異に焦点を当て分析し考察をしてきたが、送り手に関しこれまで指摘されてきたような分野や報道量などに関する問題点は、NHKにおいてはあまり進展をみしていないものの、民放2局においては解消されつつあるといえよう。ただ、3局を通じて、送り手の中でも記者、レポーターについては、問題が解決の方向に向いていたとは言い難い。将来のニュース報道を担うであろう記者、レポーターにおいて男女の差異が顕著であることは、重要な論点であり、今後のニュース報道を考える上で、女性の記者、レポーターの育成、登用が急務であるといえよう。

また、登場人物の場合、女性が極めて少なく、たとえ登場してきても職業も明らかにされず、いわば顔がないというように描写されていたことは、重要な点である。これは、ある意味においては、ニュースの中では、そこに描写される女性のおかれていた状況は以前とさほど変わらず、制作者の視点がほとんど変化していないことを示していたといえる。今後は、送り手よりむしろ、ニュース内容に登場する人物に焦点を当て、さらに、どのような視点で描かれているかという詳細な研究が引き続き必要とされていよう。なぜなら、ニュースを見ている視聴者は、どちらかといえば、送り手より登場人物に、現実社会に生

きる自分自身の姿を重ね合わせ現実認識をする可能性が高いと思われるからである。

引用文献

- Engstrom, E. and Ferri, A. J. (2000). Looking through a gendered lens: Local U. S. television news anchor's perceived career barriers. *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, 44, 614-634.
- Gerbner, G., Gross, L., Signorielli, N. and Morgan, M. (1980). Aging with television: images on television drama and conceptions of social reality. *Journal of Communication*, 30 (1), 37-47.
- 萩原滋 (2001) ニュース番組の内容と形式、萩原滋 (編著)「変容するメディアとニュース報道」、67-114、丸善株式会社。
- 井上輝子 (1992) メディア・セクシズムを撃つ―女性とメディア研究の動向と課題、「女性学研究」、第2号、158-189。
- 岩男寿美子 (2000) 「テレビドラマのメッセージ」、勁草書房。
- 岩崎千恵子・小玉美意子 (1994) メディア産業におけるジェンダー構造とジャーナリズムの新たな地平、「マス・コミュニケーション研究」、第45号、54-69。
- 加藤春恵子 (1989) 性別役割分業型ニュース批判、「マスコミ市民」、第254号、2-5。
- 小玉美意子 (1981) NHK「夜7時のニュース」における男女アナウンサーの役割、人間文化研究会編「女性と文化Ⅱ」、JCA出版。
- 小玉美意子 (1991) 「ジャーナリズムの女性観」、学文社。
- 小玉美意子ほか (1996) 日米テレビニュース研究 1994年調査 (2)、「武蔵大学人文学会雑誌第27巻」、第4号、41-97。
- Lippman, W. (1922). *Public Opinion*. New York: Free Press. 掛川トミ子訳 (1987) 「世論」、岩波書店。
- Nelson, S. (2003). Aging, woman, and local TV news. *Paper presented at the Association for Education in Journalism and Mass Communication, Kansas City, Missouri*.
- Rakow, L., & Kranich, K. (1991). Woman as sign in television news. *Journal of Communication*, 41, 8-23.
- Shoemaker, P. J. & Reese, S. D. (1996). *Mediating the Message: Theories of Influence on Mass Media Content* (2nd Edition), Longman: NY.
- Tuchman, G. (1978). *Making News*. New York: The Free Press. 鶴木真・桜内篤子

(訳) (1991)「ニュースの社会学」、三峰書房。

Turk, J. V. (1987). Sex-role stereotyping in writing the news. *Journalism Quarterly*, 64, 613-617.

Whitlow, S.S. (1977). How male and female gatekeepers respond to news stories of woman. *Journalism Quarterly*, 54, 573-579, 697.

Zoch, L. M. and Turk, J. V. (1999). Women making news: Gender as a variable in source selection and use. *Journalism & Mass communication quarterly*, 75 (4), 762-775.

注

¹ NHK では女性がサブ・キャスターであった時代を経て、1979 年 4 月、はじめて「夜 7 時のニュース」に男女ほぼ同格でニュースを伝えるコ・キャスター制を採用した(小玉、1981)。

² 男性が主で女性を従とする性別役割分業システムへの批判は、1989 年の NHK テレビのニュース「モーニングワイド」の質的研究(加藤、1989)においても見られる。

³ 岩男(2000)は、1977 年から 1994 年まで体系的な内容分析を行っている。それによると、年度を問わず、日本のテレビドラマでは、約 7 割が男性、3 割が女性と、圧倒的に男性優位となっていた。

⁴ それに対し男性アンカーは年齢や容姿は 34 項目中 24 番目とし、職業的ネットワークとサポートシステムの不足に最も職業上の障害を感じていたという。